

— INTERVIEW SIDE —

インタビュー編 目次

P2 ~ P11 出場選手へのインタビュー

» かごしま国体 陸上競技
立迫 大徳 選手



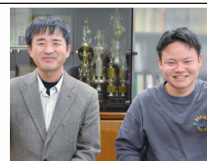
» かごしま国体 ラグビーフットボール 成年男子チーム
野脇 隆平 選手・三浦 和行 選手
森 太陽 選手



» かごしま国体 セーリング
元津 志緒・此上 友唯 ペア
原田 小夜子 選手



» かごしま大会 陸上競技
井手口 勝博 選手
永井 湧育 選手



» かごしま大会 卓球 (サウンドテーブルテニス)
春田 ゆかり 選手



P12 ~ P13 運営関係者の皆さんへのインタビュー

かごしま国体 鹿児島市ボランティア 馬場添 辰美 さん

競技会場でのふるまい提供団体 鹿児島市食生活改善推進員
連絡協議会 会長 三反田 千代子 さん

かごしま国体 競技補助員 福永 海斗 さん、東 孝子 さん

KAGOSHIMA CITY 2023 アンバサダー めい風る さん

P14 ~ P16 特別寄稿

» かごしま国体 陸上競技
成年女子800m準優勝・5000m優勝

田中 希実 選手 ~かごしま国体の記憶~





陸上競技 少年男子共通800m 優勝

立迫 大徳 選手 地元開催での栄冠 リベンジ果たしての日本一

—新聞で号外も出るなど、かごしま国体の最終日を飾る素晴らしい活躍でしたね。
—ありがとうございます。やはり地元のためか、これまでの大会とは、応援や盛り上がりがある感じが違いました。プレッシャーを感じたことも事実ですが、結果を出せて嬉しく思います。

—大会を終えて、周りの反響はどうでしたか？
—家族、特に陸上競技の指導者でもある父がとても喜んでくれました。また、鹿児島県はそれまで同競技での優勝が無かったので、

監督には関係者の方から「ぜひ優勝を」という声が寄せられて大変だったようです。その意味でも、期待に応えられてホッとしています。また、国体の直後に、鹿児島県高校駅伝大会がありました。ここでもチームが優勝しました。部の雰囲気も盛り上げ、弾みをつけることができたのも良かったです。

—800mや1500mの中距離走で活躍されていますね。この種目の特徴は？
—天保山中の陸上部時代から800m走に出っていたので、高校

でも続けています。短距離走は瞬発力、長距離走は持久力を特に求められますが、中距離走は両方必要で、ゴール間近でスパートをかけるタイミングの読みも大切です。最初の100mは各選手とも決められたレーン（セパレートゾーン）を走りますが、その先はオープンと呼ばれ、どこを走っても自由です。ここで自分に合う位置をキープしてレースについていき、最後のスパートに備えるのですが、この位置取りが難しい。位置を巡って接触・転倒することもあり、よく「陸上の格闘技」と呼ばれます。

計算された逆転劇

—レース内容についてお聞きします。決勝では滋賀県の落合選手とトップ争いを繰り広げました。

この夏、札幌で行われたインターハイ(全国高校総体)でも対戦しました。この時は彼が大会新記録で優勝して僕が2位でしたが、位置取りに手間取り、自分のリズムを作れなかったことが敗因でした。最後にスパートをかけたけれど、突き放されてしまった。国体は高校日本一になる最後のチャンスでもあり「必ずリベンジする」と心に誓っていました。落合君とは強化合宿でも言葉を交わす仲ですが、インターハイからの2カ月で体が一段と大きくなりました。手強い相手ですが、前回の負けを分析し「位置取りがうまくいけば勝てる」という

確信がありました。監督のアドバイスに従い、予選を終えた時点でコンディションが最高になるよう調整して本選に臨みました。

—決勝では、その落合選手が序盤から飛び出します。

終盤まで彼がレースをリードしましたが、僕は序盤200mの時点で、課題だった位置取りがピタリと決まりました。後は力を温存しながら彼をマークするだけです。一般には最後の200mが追い込みの範囲ですがグッとこらえ、ラスト100mで一気にギアを上げました。

—鮮やかな逆転劇でした。

読みが的中したのは大きかったと思います。1分47秒97の大会新記録は、僕にとっても自己ベストです。これ以上は望めない理想的なレースでした。



—今後の活躍にも期待がかかります。

大学進学後も中距離走を続けるつもりですが、さらにスタミナをつけて5km・1万mの長距離にも挑戦したいと思っています。大学では箱根駅伝もありますし、U20オリンピック育成競技者を受けているのでオリンピックも視野に入ります。世界でも通用する選手になりたいです。

—応援している皆さんへメッセージをお願いします。

これまでたくさんの方の励みで支えていただき、本当にありがとうございます。これからも練習を積み、自分の可能性にチャレンジしていきます。

—ありがとうございました。



鹿児島城西高等学校駅伝部の高田敏寛監督(左)と立迫大徳選手



ラスト100mのスパートで首位に浮上



力強くスタートする立迫選手(中央)



好敵手の落合選手(左)と健闘を称え合う



鮮やかな逆転勝ちを決め力強くガッツポーズ





ラグビーフットボール 準優勝

成年男子チーム

野脇 隆平 選手 / 三浦 和行 選手
森 太陽 選手

延期を乗り越え
ワンチームでつかんだ準優勝



桜島をバックにポーズを決める森太陽選手、野脇隆平選手、三浦和行選手（左から）

—ラグビーとの出会いを教えてください。
野脇 私は宮崎県出身ですが、小学生でも参加できるラグビースクールがあり、小学2年生で始めました。宮崎は低年齢向けのラグ

ビーが割と盛んで、当時は8チームありました。現在は鹿児島銀行に勤める傍ら、自社のクラブチームで活動しています。
三浦 出身地の福岡はラグビーの強豪県ですが、私が始めたのは比

較的遅くて高校の部活動でした。今は教職の傍ら、甲南クラブというチームに所属してプレーを続けています。
森 中学時代はクラブチームでプレーしていました。鹿児島実業高校でラグビー部に入部しましたが、とても厳しかったことは今も思い出に残っています。現在は務める会社（日特スパークテックWKS）の社会人チームでプレーを続けています。

—それぞれに活動される皆さんですが、代表チームはどのように決まったのでしょうか？
野脇 総監督の藤崎さんいわく、プレーの技量はもちろんですが「人間性」や「コミュニケーション能力」も大事にした選手選考だそうです。

三浦 私が大学生だった2014年ごろには、すでにかごしま国体に向けたチーム作りが始まっていました。当時から関わってきたので、今回のメンバーでは最古参になります。森君が決まったのは2022年7月でした。春の練習試合でステップの良さが監督の目に留まったようです。

—選出されたときの気持ちは？
三浦 もちろん素直に嬉しいものですが、選ばれなかった仲間たちの気持ちも考えなければいけません。仲間の分まで頑張らねば」という責任感がありました。これはどの選手も同じだと思います。

—試合は延長までもつれました。いかに相手が強いはいえ、延長戦までもつれこんだので、終わったときはただ悔しいの一言でした。
三浦 一方で、選手全員が試合でトライを決めたのは素晴らしい成果です。なかなかできることではなく、私がいわて国体に出場したときは、ワントライも取ることはできませんでした。

野脇 私がいかに相手が強いはいえ、延長戦までもつれこんだので、終わったときはただ悔しいの一言でした。
三浦 一方で、選手全員が試合でトライを決めたのは素晴らしい成果です。なかなかできることではなく、私がいわて国体に出場したときは、ワントライも取ることはできませんでした。



—かごしま国体の3年延期は、どのような影響がありましたか？
三浦 私と野脇君は、延期がなければ26歳で本番を迎えたはずでした。選手として最も体力的に充実する時期であり、そこから3年延びるのはやはり痛手です。チーム全体がどのように変わるか予想が付かない不安もありました。

森 私の場合は、延期のおかげでチャンスが回ってきたことになりました。
—延期開催が決まり、新チームで活動を始めたときの印象はいかがでしたか？
野脇 私がキャプテンを務めることになりましたが、始動当初はメンバーの気持ちもバラバラで、どのように戦うか戦術が定まっていっていませんでした。同い年の三浦君とは大学時代から交流があり、いろいろと相談して助けてもらうことが多かったです。

—三浦さんは2016年のいわて国体で準優勝を経験しています。当時とチームの雰囲気の違いは？
野脇 私がいかに相手が強いはいえ、延長戦までもつれこんだので、終わったときはただ悔しいの一言でした。
三浦 一方で、選手全員が試合でトライを決めたのは素晴らしい成果です。なかなかできることではなく、私がいわて国体に出場したときは、ワントライも取ることはできませんでした。

—決勝トーナメント前で、印象に残っている場面はありますか？
野脇 2日目の試合前、桑水流監督が選手を集めて「連日試合が続けば、2日目は疲労でどうしてもパフォーマンスが悪くなる。だが、試合前のウォーミングアップでどれだけ体を動かせるかで勝負は決まる。辛くても、今こそ積極的に動こう」と発破をかけました。オリンピック出場など経験豊富なベテランの一言で、一気に士気が上がったのが印象的でした。

—決勝トーナメントも順調に勝ち上がり、最終戦は国体連覇中の三重県でした。
野脇/森 三重県はプロの選手が中心で、その強さはよく知られています。もちろん全力を尽くしますが、「相手の胸を借りて試合を楽しもう」という思いで臨みました。
—その三重県相手に、前半で追いつき、後半は一時逆転します。
三浦 これまで封印していた味方同士のサインを使うなど、工夫できることを全てやりました。会場からの声援もすごかったです。「これはいける」という思いは十分にありました。

森 ラインアウトからボールを受け取った桑水流さんが、見事なオフロードパス(相手のタックルを受け、倒れる前に味方にボールを渡す)を決めたのはとても印象に残っています。
—今後の目標などをお聞かせください。
森 社会人ラグビーの九州リーグで、所属チームをAランクに押



予選リーグ対埼玉戦、好プレーに雄たけびを上げる野脇選手(右)

—試合は延長までもつれました。いかに相手が強いはいえ、延長戦までもつれこんだので、終わったときはただ悔しいの一言でした。
三浦 一方で、選手全員が試合でトライを決めたのは素晴らしい成果です。なかなかできることではなく、私がいわて国体に出場したときは、ワントライも取ることはできませんでした。

野脇 私がいかに相手が強いはいえ、延長戦までもつれこんだので、終わったときはただ悔しいの一言でした。
三浦 一方で、選手全員が試合でトライを決めたのは素晴らしい成果です。なかなかできることではなく、私がいわて国体に出場したときは、ワントライも取ることはできませんでした。

森 ラインアウトからボールを受け取った桑水流さんが、見事なオフロードパス(相手のタックルを受け、倒れる前に味方にボールを渡す)を決めたのはとても印象に残っています。
—今後の目標などをお聞かせください。
森 社会人ラグビーの九州リーグで、所属チームをAランクに押



予選リーグ対埼玉戦、好プレーに雄たけびを上げる野脇選手(右)

—試合は延長までもつれました。いかに相手が強いはいえ、延長戦までもつれこんだので、終わったときはただ悔しいの一言でした。
三浦 一方で、選手全員が試合でトライを決めたのは素晴らしい成果です。なかなかできることではなく、私がいわて国体に出場したときは、ワントライも取ることはできませんでした。

野脇 私がいかに相手が強いはいえ、延長戦までもつれこんだので、終わったときはただ悔しいの一言でした。
三浦 一方で、選手全員が試合でトライを決めたのは素晴らしい成果です。なかなかできることではなく、私がいわて国体に出場したときは、ワントライも取ることはできませんでした。

森 ラインアウトからボールを受け取った桑水流さんが、見事なオフロードパス(相手のタックルを受け、倒れる前に味方にボールを渡す)を決めたのはとても印象に残っています。
—今後の目標などをお聞かせください。
森 社会人ラグビーの九州リーグで、所属チームをAランクに押



予選リーグ対埼玉戦、好プレーに雄たけびを上げる野脇選手(右)

成年女子セーリングスピリッツ級 優勝

元津 志緒・此上 友唯 ペア

成年女子ILCA6級 準優勝

原田 小夜子 選手

ホーム・錦江湾を
知り尽くしての大活躍



爽やかな笑顔を見せる原田小夜子選手、元津志緒選手、此上友唯選手（左から）

—まずは国体が終わっての感想をお聞きます。
原田 何よりも3年の延期を経て、ようやく開催を迎えられたこと、そして無事に終わったことにホッとしています。

元津 私も同感です。レースは1日だけでしたが、成績も残せたことに安心しました。
此上 まずは事故もなく、皆さんに無事帰ってもらえて良かったです。セーリングのコンディション

は当日にならないと分からないので、競技が成立したことに安堵しました。

—新型コロナの影響で3年のブランクがありました。どんな影響がありましたか？
原田 かがしま国体を最後に引退するつもりだったので、開催が本当に延期されるのか、さらにつまみ延びるのか、見通しが立たない状況には困りました。結局3年延びて、自分の年齢を考えると不安もありましたが、人生の一区切りとして出場しようと決めました。

元津 私は東京で働きながら週末に練習する暮らしで、それがさらに3年間続くことには葛藤がありました。ただ、此上さんを競技のペアに誘った責任があるので、退職して鹿児島へ戻り、練習の環境を整えました。結果的には良かったですね。

此上 私は開催予定だった前年（2019年）に出場が決まりましたが、ちょうど技量不足に悩んでいた時期でもありました。延期は予想外でしたが、立て直しの時間があったのも事実です。（ペアの）元津さんの兄である元津大地監督と原田さんからテクニクを教わり、格段にレベルが上がるのを実感できました。その意味では禍が福に転じた部分もあります。

—皆さんが競技を始めたきっかけは？
原田 父が趣味でウインドサーフィンをしていたので、一緒に海へ遊びに行っていたので、一緒に始めました。出身の長崎県には小中学生向けのヨットクラブがあり、兄が所属していた影響も大きかったです。

元津 私も兄がジュニアヨットクラブに所属していたので、一緒に付いていったのが始まりです。中学時代はスポーツクライミングに夢中で国体の山岳競技に出場したこともありましたが、高校進学時に「今後勝てそうな競技はどちらか」を考え、セーリングに戻りました。

此上 私は高校の部活動からです。和歌山県の出身ですが、元々「インターハイや国体に出てみたい」という思いがあり、進学先のヨット部が強豪だったので入部しました。ちょうど和歌山国体が開催された時期で、世界で活躍するようなトップ選手の姿を見られたのも大きかったです。

—元津選手と此上選手は、2人で大会に臨みました。ペアとしての感想は？
元津 最高のパートナーです（笑）。此上 元津さんのことはとても尊敬しています。明るくポジティブで、真摯に練習に取り組み姿や逃げない姿勢は「私も頑張ろう」と思われます。
原田 どのペア競技も、互いに信頼関係を築けないと疑心暗鬼になり、動きに影響が出るものです。私から見ても、この2人は常にお互いのことを考え、相手を尊重しているのがよく分かります。
—今後の展望をお聞きます。
原田/元津/此上 これからはそれぞれの道を歩むことになりま



先手必勝で
つかんだ勝利

—かがしま国体のレースについてお伺いします。

原田 結果として6レースの予定が4レースで終わりましたが、錦江湾の風の多さは知っていたので、大会が予定通りに進むことはないだろうと見込んでいました。レースができる状況なら、先手必勝で早めに成績を残せるようにしよう。あらかじめ気象条件を想定して、どつしりとしたスタンスで臨めたのは良かったと思います。まさか1日に4レースすることになるとは思いませんでしたが（笑）

元津 当日は海面の状態や風向きなど、艇を操るのが難しいコンディションでした。そこも含めて「いつレースが終わってもおかしくない」と覚悟を決めて、一つ一つのレースとその時々のおかしさに集中しました。良い準備ができていたと思います。

此上 ただ、帰ってくるまで優勝

したとは知りませんでした。競技中もそれなりに見てはいるのですが、立て続けのレースだったので、順位や点数の把握が追いつきませんでした。とにかく目の前のことで必死でしたが、充実感のあるレースでもありました。

ものを探してみたいです。
原田 大学を卒業してから「職業セーリング選手」の人生でしたが、それもひと通りやりきった感があります。これまでは、人に教えるより自分が乗る方が好きでしたが、これからは裏方や大会の運営など、選手を支える側で立てることがあれば力になりたいです。

—最後にセーリング連盟や大会を支えた方、鹿児島島の皆さんへひと言をお願いします。
此上 普段の練習から国体の当日まで、皆さんが本当にたくさん声をかけてくださったのが嬉しかったです。セーリングに携わる者同士、ポジティブな言葉を掛け合って楽しい時間を共有できたことはすばらしい体験でした。そんな輪がこれからも広がってくればと思います。

原田/元津/此上 これからはそれぞれの道を歩むことになりま

此上 かがしま国体を通じて、高校のヨット部や地域の方々との皆さんの思い出ができました。今後は、セーリングを楽しむ人をさらに増やしていけるような、そんなお手伝いができればと思います。

元津 私は第一線を退くつもりです。半年間好きなことを続けてきましたし、また新たに打ち込める



桜島を望む競技会場



巧みに帆を操る元津・此上ペア



風を受けて快走する原田選手



レースに向けて準備する原田選手





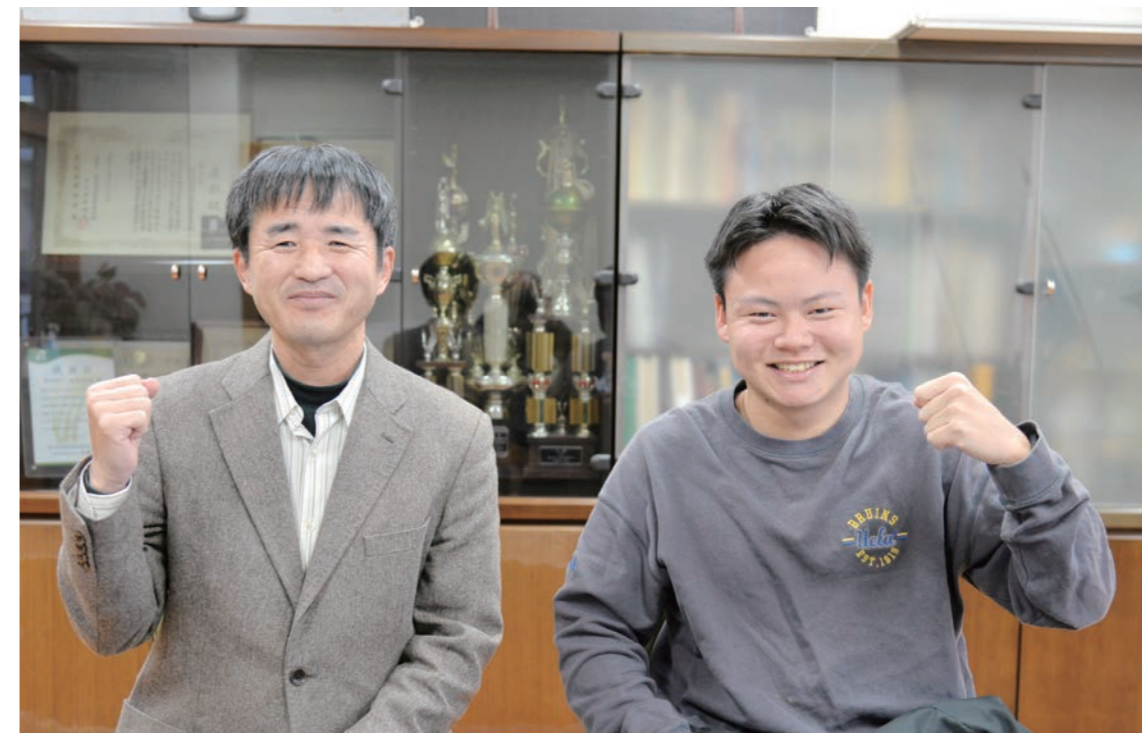
陸上競技 視覚障害者男子2部 50m・走幅跳 優勝

井手口 勝博 選手

陸上競技 視覚障害者男子1部 200m 準優勝/100m 3位

永井 湧育 選手

世代を超え 共に挑んだ「かごしま大会」



盲学校の先生と生徒の関係でもある井手口勝博選手（左）と永井湧育選手

—かごしま大会では、それぞれ素晴らしい成績を残されましたが、大会を振り返っていかがですか？

井手口 今回の大会を通して、鹿児島県の皆さんに障害者スポーツの

世界を知っていただけたことは有意義だったと思います。また、会場では多くの声援を頂き、競技者として大変励みになりました。本当にありがとうございました。

永井 私は盲学校に入って、初め

—お二人の競技歴を教えてください。

井手口 趣味でフルマラソンなどに参加したことはありませんが、若い頃から本格的にやっていたわけではありません。目が不自由になって走るのは難しいと思っていた折、視覚障害者向けの「ブラインドランナーズ」というクラブがあることを知りました。伴走者と一緒に風を切りながら走る楽しさを覚えてから本格的に競技を始め、最初は長距離、5年前に短距離に転向しました。走幅跳は、昨年のとちぎ大会に参加するため挑戦したのがきっかけです。

—それぞれ種目は異なりますが、大会へ向けてどのように準備しましたか？

井手口 50mは週1回ペースで伴走者と練習するほか、所属するブラインドランナーズの活動を通して調整しました。走幅跳の場合は、練習できる施設が限られるため、月2回の練習でした。

永井 私は週3回ほど放課後に、体育の先生方に力添えをいただきながら練習しました。現役から離れて長かったので、最初は思うように体が動きませんでした。次第に感覚が戻っていくのを感じました。

—かごしま大会を迎えての仕上がりはいかがでしたか？

井手口 実は3月に走幅跳の練習

分るまで気が抜けません。今大会はパラリンピックなどにも出場する強豪選手もいたので、力は尽くしましたが、結果がどうなるか予想が付きませんでした。

—最後に市民の皆さんへのメッセージをお願いします。

永井 観客席から大きな声援をいただき、開会式や入場イベントを盛り上げてくださった小・中学生の応援もとても力になりました。忘れられない思い出となり、感謝しています。

—地元開催への意気込みはいかがでしたか？

井手口 選手選考は、5月に開催された県大会の記録を基に行われましたが、出場は強く意識していません。一方で私の場合、前年にとちぎ大会へ出場したことから「前回の自己ベスト記録を更新しなければ連続出場はかなわない」と思って、県大会では大変緊張しました。

習で、着地の失敗から足を痛めてしまいました。その後も同じような怪我が続き、調子上げるのに苦労しました。大会直前によくサポーターを外せた状態で、本当に冷や汗ものの開幕でした。永井 体が昔の感覚を取り戻し、十分に調子も上がって本番を迎えることができました。秋に入ると朝夕と昼の寒暖差が大きくなったので、服装を加減するなど体調管理には特に気を使いました。ベストの状態です。

障スポから新たなステージへの挑戦へ

—試合の感想を教えてください。

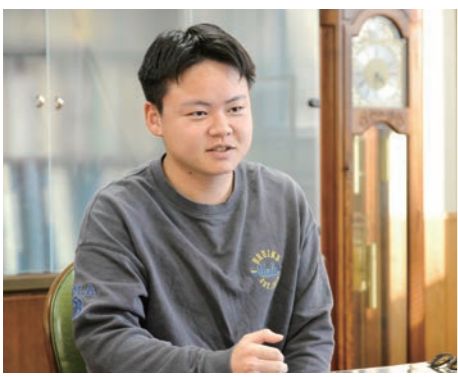
井手口 私が出場した50mは、他のランナーと同時に走る一般的なレースと違って、各人のタイムを競うスタイルです。そのため、走り終えても全出場者の記録が

—かごしま大会を終え、今後の目標をお聞かせください。

井手口 全国障害者スポーツ大会に加えて、現在はマスターズ陸上の出場に向けて頑張っています。走幅跳はこれからも続け、他の種目にもチャレンジするつもりです。

—ありがとうございます。

永井 かごしま大会の出場を機に、私もブラインドランナーズの練習に参加しています。これからは次の佐賀大会をはじめ、各レースへの出場を目標に体を鍛え、現在の自分を超越することを目指します。チャンスがあれば、いろいろ



—かごしま大会を終え、今後の目標をお聞かせください。

井手口 全国障害者スポーツ大会に加えて、現在はマスターズ陸上の出場に向けて頑張っています。走幅跳はこれからも続け、他の種目にもチャレンジするつもりです。



閉会式では県代表として2人でコメント



200mで疾走する永井選手



走幅跳で大会新をマークした井手口選手



かごしま大会 卓球(サウンドテーブルテニス) 視覚障害者女子2部 優勝

春田 ゆかり 選手 かごしま大会をきっかけに より良い社会へ

—かごしま大会は卓球での出場でしたが、これまで様々な競技にチャレンジされていますね。

活発な弟がいる家庭だったので、幼い頃から体を動かすのが好きでした。学生時代は部活動でバレーボールをしていましたし、障害者向けの競技会では60m走や立幅跳などにも出場しました。

—今回出場したのは、卓球のサウンドテーブルテニスでした。

視覚障害者も参加できるようにアレンジされた種目で、パウンドするボールを打ち合う一般的な卓球と違い、ボールを転がしてラリーを繰り返します。ボールには金属球が入っていて音を立てるの

で、その音を頼りにプレーするわけです。

—キャリアは長いのですか？

かごしま大会の前にも、地方大会には何度か出場しています。サウンドテーブルテニスはハートピアかごしまに専用の施設があり、ヘルパーさんのサポートで練習ができるので助かっています。運動量が適度で続けやすい種目です。

—かごしま大会の選手に選ばれたときの感想はどうでしたか？

出場は基本、性別を問わず1県2枠ですが、開催地の鹿児島は5人の枠があり、チャンスをものにできました。新型コロナの影響



—本番を迎え、試合の感触はいかがでしたか？
2試合を戦いましたが、1試合目は順調でした。しかし2試合目は大変苦戦し、全5セットのうち2セットを先取され、後が無くなりました。さすがに焦りましたが、このとき私を救ってくれたのは、コーチからの「楽しんでいこう」の言葉でした。

—コーチの言葉でどんな影響がありましたか？

少し冷静になり、相手の打ち方を読もうと意識しました。サウンドテーブルテニスは、プレーの前に選手同士で声掛け・返事を調整して心理的な駆け引きをしたり、ボールを返すスピードを変化させたりすることで、相手のリズムを乱すことができました。そこを突いて3セット目を奪取し、残り2セットも立て続けに取ることができました。後がない状況で連続3セット取ったのは、初めてだったかもしれません。

—普段の練習量はどれくらいですか？

仕事もありますので週1〜2回です。日曜日には合同練習をしています。大会出場が決まってからは仲間と協力してもらい、速いラリーにも対応できるようにするなど、メニューを工夫しながら練習に打ち込みました。

—国体の総合閉会式では、かごしま大会への炬火の引き継ぎ役を務めました。

盲導犬と一緒に走った参加者は、私が初めてではないかと思えます。炬火を受け取って「今度は自分たちが頑張らねば」と気が引



パートナーである盲導犬のジュノーと

誰もがより良く暮らせる社会に

—今後の目標などをお聞かせください。

まずは競技を続け、次の全国障害者スポーツ大会に出場したいです。佐賀県での開催になりますが、出場枠が2人に減るので、そこに入れるように頑張ります。また、選手の高齢化が進んでいるので、若い人が増えるような取り組みを続けていきたいです。

—かごしま大会では、全国から障害を持つ多くの選手が集まりました。迎える側として気付いたことはありますか？

空港では、障害を持つ人への接客を学ぶ講習会が開かれ、私も買い物客の役で参加しました。普段、お店などが障害を持つ人に接客す

る機会は少ないと思うので、新たな気付きを得られたのではないかと思います。

また、盲導犬をパートナーとする立場で話をすると、近頃は鹿児島でも入店を拒まれることは少なくなりました。それでも、犬だけ外で待つよう求められるケースなどもあり、かごしま大会ではそうしたことが無いよう、周知を徹底するようお願いしました。

また、盲導犬は勝手に排泄しないよう訓練されていますが、街なかなどでトイレの場所に困ることが多いです。大会の前に空港に設置されましたが、既存の施設でもわずかな改修で対応できるので、こうした面でも改善が進むことを願います。

—皆さんに一言お願いします。

これまで多くの方に応援していただき、心から感謝したいです。



金メダルを手にする春田選手



サウンドテーブルテニスの練習風景。音に神経を研ぎ澄まし、ボールを打ち返していく



サウンドテーブルテニスに使用されるラケットと金属球入りのボール



かごしま国体の総合閉会式では、かごしま大会への炬火の引き継ぎ役を務めた



—まさに大逆転ですね。
涙が出るほど嬉しかったです。また、本番であることに加え、テレビカメラが入っていると聞いて緊張していたので、優勝できて本当にホッとしました。仲間たちも試合展開にはビックリしたようです。

運営関係者の皆さん

ボランティアとして
携わって

かごしま国体の開催期間中は2回活動し、選手や観客の皆さんに最高のおもてなしの心で、鹿児島島の魅力をお伝えできたと思います。実は、延期前にもボランティアとして活動し、リハーサル大会の運営や広報ボランティアとしてイベントのお手伝いもしました。

広報では、塗り絵や缶バッジ作りで子どもたちの熱い視線を受け、チラシの配布でも多くの方に関心を持っていただきました。特に、私が一番心に残っているのが、選手などへの記念品を考えたことです。もらってうれしいもの、鹿児島らしいものを有志のボランティアで知恵や知識を出し合って、オリジ



かごしま国体 鹿児島市ボランティア
馬場添 辰美さん

ナルのグラスに決めました。完成品を見たときは、全員で感動したのを覚えています。記念品は特別国体に引き継がれ、その点でも思い出深いものになりました。かごしま国体に携われたことに感謝します。ありがとうございました。



ふるまいで「おもてなし」

かごしま国体で全国から訪れる選手や関係者を郷土料理で応援する「ふるまい」の取り組みに参加しました。ふるまい当日は朝8時半から調理を開始。メンバー30人で気合い十分に、鹿児島の郷土料理「がね」と「ふくれ菓子」を300食ずつ作りま



調理は、例年より暑い日が多かったこともあり、衛生管理には特に気を使いました。「がね」は油で揚げた内部が、「ふくれ菓子」は蒸し上がりで90度以上にする必要があります。それぞれ温度計でチェックして完成。その後、粗熱を取り、急いで20度以下に冷やす作業に入りました。これほど多くの量を管理した経験はありませんでしたが、ペットボトルに水を入れて凍らせたものをみんなで持ち寄り、力を合わせて乗り越えることができました。



競技会場でのふるまい提供団体
会長 三反田 千代子さん (右)
(鹿児島市食生活改善推進員連絡協議会)

トッププレーに感動

南栄リース桜島アリーナで行われたバレーボール(少年男子)で、競技補助員として従事しました。試合が円滑に進むよう、サーブの選手に素早くボールを回す「ボールリトリーバー」という役割でしたが、試合運営に携わる責任を感じ、とても緊張しました。試合に出るときよりも緊張したと思います。

試合中は、コートに座っている時間が長くてきつかったですが、憧れの有名選手からボールを受け取ることができ、うれしい思い出となりました。また、トップレベルのプレーを目の当たりにして、勉強...というよりは「すごい！」と感動しましたし、自分自身の練習へのモチベーションにもつながりました。

国体で使用したボールを学校に譲ってもらったこともあり、今後も練習に励んで春高バレーの県予選で優勝し、本選に出られるように頑張りたいです。



かごしま国体 競技補助員
福永 海斗さん
(樟南高等学校)

経験が
モチベーションに



かごしま国体 競技補助員
東 孝子さん
(鹿児島実業高等学校)

東開庭球場で行われたソフトテニスで、競技補助員として「スコアラ」を務めました。雨で試合が中断し、3時間ほど待機するような場面もありましたが、選手のプレーを間近に見ることができ、とても良い経験になりました。

また、運営の立場ではありませんでしたが、鹿児島県の選手が1戦目に勝利したことにも印象に残っています。少年種別での従事だったので、これまで対戦したことのある選手が活躍する姿を見られたこともうれしかったです。

私は現在、男子チームのマネージャーをしています。今回の経験が今後のモチベーションにつながりました。チームが大会で良い結果を出せるよう、自分の役割を果たして頑張りたいと思います。

やっぱり鹿児島はあたたかい

インフルエンサーとしてかごしま国体・大会のPRに携わらせていただいたほか、鹿児島市の魅力を発信する「KAGOSHIMA CITY 2023 アンバサダー」にも参加し、期間中に鹿児島中央駅で行われたイベントでは、皆さんの前で少しだけマイクを握らせていただく機会もありました。

活動を通して、選手の方々の競技への熱い気持ちを知ることができ、実際にいくつかの会場に足を運んでみると、地元の方々の声援や熱量に圧倒されました。

県内外の選手や応援の方々からのリアクションに加え、飲食店、鹿児島を初めて訪れた人や両大会の存在を知らなかった人などからも数多くの嬉しい声をいただきました。鹿児島の人にはあたたかい「県内外の人に鹿児島的美しい物を

味い物を



KAGOSHIMA CITY
2023 アンバサダー
めい風るさん

田中希実

(ニューバランス所属)

かごしま国体 5000m 優勝
陸上競技 800m 準優勝

Tanaka Nozomi

かごしま国体の記憶

私 がかごしま国体の存在を知ったのは、2017年、高校3年時の春だった。その時私たちが西脇工業(兵庫県)の女子陸上部は、選抜メンバーのみ初めて鹿児島に連れてきてもらって、京

セラ女子陸上部の拠点を使わせて頂きながら合宿をしていた。何もかも初めてのこと尽くしなだけでなく、練習も朝と午後走るのに加えて、合間に近くのプール施設に歩いて行って泳ぐという、いつも

以上に運動量の多い合宿で、とてもきつかったことを覚えている。そのプール施設だったか、合宿中に立ち寄ったスポーツ施設の中で、「かごしま国体2020」の幟を見つけたのだ。陸上部の仲間がワイワイ騒ぐ声がスウッと遠ざかり、私はその幟に見入った。私は、中学3年で初めて国体に出場し、以降高1では1500mで優勝、高2でも出場していた。当時の私には知る由もなかったが、その後、高3での国体においても、3000mで優勝している。インターハイでは一度も優勝できなかった私は、どういうわけか国体と相性が良かった。その国体が、当時2020年に開催予定だった



鹿児島のお姉さんと

東京五輪と同じ年に行われる！当時の私にとって五輪は夢のまな夢だったが、東京五輪の熱狂冷めやらぬ中、国民にとっての夢の舞台・国体で、再び集う五輪アスリートたち。五輪アスリートかは別として、その舞台を共にする私。それを想像すると、胸が熱くなった。そして開催地は鹿児島！鹿児島は、私にとってお姉さんのような存在の人の故郷なのだ。その人は、もつと時を遡り、私が保育園児だった頃、2年間ほど私の家に住んでいた。彼女は、実業団をやめた後も走ることを諦め切れなかったのだが、仕事の傍ら満足に走る環境を作るなど、今以上に何の道筋もない時分だった。それでも彼女は、実業団に所属せず、子育てしながら、並み居る実業団選手を抑えて北海道マラソンで2回優勝したことがあるという、私の母を探し当てた。そしてとんとん拍子に我が家への移住が決まり、私も、ある日突然やってきたお姉さんと何の違和感もなく暮らし始



めた。

その後、彼女はまた元の実業団に呼んでもらえるだけの実力を取り戻し、最終的に鹿児島銀行の一期生として移籍し、故郷鹿児島で走り終えた。

そのお姉さんが見てくれるのなら、私自身も東京五輪に出たアスリートとして2020年の鹿児島を走りたいときえ思った。どんなに陸上関係者から東京五輪のことをほめかされてもなびかなかつた私が、自然と自分から、東京五輪に出てみたいと思ったときつかけは、思い返すとかごしま国体だったような気がする。

ちなみに、かごしま国体の存在を知った運命のその合宿には、きつさ以外の思い出もちゃんとある。1日フリーが与えられれば、天文館はもちろん、桜島、指宿の砂蒸し風呂、知覧の特攻平和会館と、詰め込みで堪能した記憶がある。みんな大満足だった。最終日には熊本の試合へ移動して走ったのだが、疲労困憊だったのに、不思議と私はとてもいい記録が出た。

問 題の2020年、コロナ禍によって、かごしま国体はもちろん、東京五輪をはじめとするあらゆる大会の中止・延期が決まり、その年の春、私は先の見えない苦しみに喘いだ。人の数だけ違った苦しみがあっただろうし、そのこと自体がなんとも言えない閉塞感を生んでいた。それでも私は、地元の中高生と集って、ひっ

そりと走ることに喜びを見出した。スポーツは、有事ではいとも簡単に排斥されこそすれ、絶対に無くならないのだと知った。それを証明するように、2021年に東京五輪はなんと開催されたが、かごしま国体は何年後かに延期してまで本当に開催されるのか、不安が募った。コロナ禍を経て、私にとってのかごしま国体は、当初思い描いた形とは違ってしまったが、それでも私の中で輝きが失われなかったのは、前述したお姉さんが、いつでも鹿児島で待っていてくれたからかもしれない。

そしてやっと2023年になって、特別国体という名でかごしま国体が開催された。国体は、このかごしま国体を最後に、次回から国スポに生まれ変わるという。私は800mと5000mの2種目で出場した。東京五輪を経たアスリートとして。

奇しくも、今回私は高3時とは反対に、熊本合宿から鹿児島入りという逆ルートを取って、かごしま国体に臨むことになった。その合宿を神村学園の子と共にしたので、大会が始まる前にして、つくづく私は鹿児島と縁深い気がしてきた。

お姉さんと再会を果たし、レースの合間には一緒に食事に行ったり、かごしま近代文学館に行ったりした。なんと、鹿児島は私のお姉さんの故郷であるだけでなく、大好きな脚本家の向田邦子さん

の「故郷もどき」でもあったというところに、今更ながら思い当たった。読書の趣味も合う私たち「姉妹」は、しきりに感心しながら鹿児島文学に触れた。鹿児島は、文学的に見てもなんとという土壌だろう。

なんだか、出場すること、鹿児島に来ることが最大の目的であり、実際のレースへのこだわりが二の次になってしまふ気がするくらい、私は満ち足りていた。そのうち、そこに焦燥感と寂寥感を同時に感じた。私は現役アスリートである。一つ一つのレースにこだわりながらも、次々といくつもの大会を走って未来を切り拓かねばならないのに、ずっと何年も楽し

みにしてきた大会が過ぎ去ってしまふことがやけに不思議な気がして、気を取られている。これではまるで、かごしま国体と共にアスリートとしての大事な何かと別れ去ろうとしているようではないか。これで終わるつもりはさらさらなくても、これで本当に全てが終わってしまうよう、どうしようもなく切なくなった。

最終日、鹿児島代表の立迫大徳

くんの800mを、お姉さんと一緒に応援した。立迫くんは、お姉さんが鹿児島銀行で走っていた時の監督の息子さんなのだ。彼は情熱そのものでレースを駆け抜け、優勝した。多分、レースの場だけでなく、大会期間中ずっと、いや、そのもつと前からずっと、緊張の糸を切らさずに、大切に守ってきたのだろう。

この国体に出場すること自体が一番の目的というところが、私にとっては理想の走りに向かっていけない言い訳として、いつの間にか根付いてしまっていたのだろう。

想いの強さというより、その想いの方向性によって、こうも優勝



熊本合宿から一緒に鹿児島入りした神村学園のカリバ・カロライン選手と



少年男子共通800m優勝の立迫選手と

という事実の輝きが違ってくることにはショックを受けた。一方、高校時代の私もそうだったように、当たり前前に、常に全力で駆け抜けられる立迫くんをみて、嬉しくもなった。アスリートとして大切な真髄は決して変わることはないし、次の世代でも、ずっと引き継がれていく。そう、体育がスポーツという呼び名が変わるうが、昔も今も、真髄は絶対に変

わっていないはずだ。それでも容赦なく、私にとっての大切なかごしま国体は、終わりを告げた。そして私は今、どうやら無事には走り続けているようだ。かごしま国体が終わっても、喪失感に襲われることはなかったし、今後に控える数々の試合に向けて、やっていくことが山ほどある。喪失感どころか、かごしま国体に「出場する」ということが私



にとつて重要だったように、かごしま国体に「出場した」ということが、今の私にとつての重要な足がかりになってきている。お姉さんと再会したこと、ずっと変わらない自分自身、そしてずっと変わらぬ見守ってくれる他者を思い出し、安心することができた。反対に、長い道のりを経験して、遠くまで来た自分自身と他者を思い、これからの目をやること

ができた。そして先日、全国高校駅伝の観戦に行つた時、2020年にはまだ中学生だった、コロナ禍中の練習仲間、かごしま国体前の熊本合宿を共にした神村学園の子、そして立迫くんが同じ都大路の舞台を駆け抜けるのを見た。

かごしま国体が私にとつてはフィナーレのように感じたが、その時は都大路がフィナーレのように感じた。きつと、そのように感じる素晴らしい瞬間は、この先何度も訪れるに違いない。しかもそれらの瞬間は、偶然とは言い切れない因果関係で繋がりが、時間となつて途切れず流れていく。だからこそ、終わらせてはいけない。きつと、そこまでムキにならなくても決して終わることはないだろう。その真理は、かごしま国体に狙い定めたように噴火した桜島に、非常に通じるものがあると今書きながら気づいた。大会期間中、桜島の灰は盛んに降り注いだ。その噴火と選手

闘に、大会関係者や観戦者の愛情こもつた視線が、等しく注がれた。ここに長文で挙げたような沢山の個人的な経緯だけでなく、あの会場の空気そのものが、自然体で走り続けることを祝福してくれていた。

実のところ、かごしま国体の会場を後にする際目にしたPRの大

看板からもすでに、答えはもらったのだ。躍動するアスリートたちのイラストと共に、「ストーリーは続く」というキャッチフレーズが躍つて見えた。悠久の時を桜島のようにどっしりと構えて生き続け、いつか、私にとつても「故郷もどき」と言いたい鹿児島に戻つてこよう。



PROFILE

田中 希実
1999年9月4日生まれ。兵庫県出身。
専門は中・長距離走。女子1000m・1500m・3000m・5000mなどの日本記録保持者。
New Balance所属。
ブダペスト2023世界陸上競技選手権大会女子5000m8位入賞、IAAFダイヤモンドリーグブリュッセル大会女子5000m3位。